

「巻き込まれ親父の潜入」

作 藤次郎政秀

●プロローグ

エージェント業務と言うのは、エージェントが得意とする分野の仕事を受ける。出来ないことは出来ない、出来る仕事は受ける…と言うのは、当たり前であるが、仕事を選びすぎると食べていけない。多少無理しても聞きかじりの知識で仕事を受け、そこから新たな事が得られる事がある。

H Gの弟子の娘共…碓屋のエージェント達は、警護任務を主に請け負っているが、その技能はB S A Tに混じって対応できる者達である。彼女らはいつB S A T作戦なみの依頼があっても対応できるように日々訓練を行っているが、H Gは彼女達には危ない目にあわしたくないと考えていて、親父の心娘知らず、娘の期待親父知らずの状態である。

●葛葉組事務所

H Gは商店街会長のD Aに呼び出された。

「おう、H Gよく来た」

「今日は、なんの用事ですか？」

「Y市にある国際大学の理事長から相談があつてな、最新の研究結果が外部に流出しているらしいとの相談を受けてな」

「？」

「詳しい事は、儂にはさっぱりなんだが…大学の研究室に何者が入り込んだ形跡とかあったり、サンプル…？て言うのが偽物とすり替わっていたり…とか言ってるんだが、なにせ儂には学が無くてなあ…H Gお前さんなら、何か力になれるかもしれないと思って、先方に話をしておいた。取り敢えず話だけでも聞いてくれんか？ダメならその場で断っても構わん」

「はあ…」

H Gが商店街会長、任侠集団葛葉組の親分D Aと、そのY市にある国際大学の理事長とやらの関係について想像がつかなかった。以前D Aの紹介で芸能事務所〇×エージェンシー社長のM Kを紹介された事があったが、その時は海浜アリーナでの興行関係で知り合ったのだろうか（「巻き込まれ親父の突入」参照）…と言う想像がついたが、今回は全くわからなかった。

「…どう関係ですか？」

とH Gが正直に訊ねると、

「あの理事長も驚らの親戚筋にあたる」

「どなたの？（H Gの記憶にある曾祖母が結婚した旦那さん姓で、D 姓、J 姓、I 姓に連なる人で、学校関係者が居る記憶が無い。作者注）」

「A 姓だよ…ひい婆さんの実家の」

「はい？」

H Gは以前白山亭のボイラーの交換部品に困っていた時に、同型のボイラーを使っている曾祖母の実家のA 味噌醤油店の社長に話をすると、A 味噌醤油店の先々代の社長の弟がY 海軍基地の軍学校の機関科の学部長という縁から、Y 海軍基地の海軍工廠との話が通じ、交換部品が安価で入手出来ることになった。

D Aの話では、曾祖母の実家のA 味噌醤油店は、大昔から味噌・醤油の製造販売をして、Y 海軍基地とY 国際港に停泊する船舶や警察関係を始めるとする役所関係と言う大口の顧客があったため、子供には十分な教育を受けさせる事が出来たそうだ。そのため、A 味噌醤油店の跡継ぎの人も優秀な方が多いし、この弟妹達も優秀な人が多く、教師や医者になった方が多く居たそうだ。それを聞いて、H Gは「俺が民兵会社時代に教導隊の隊長になって多くの社員達を育成し、その中の4人が弟子になったのは、曾祖母の実家の家系の影響もあつ

たのかなあ…)」と思った。

●Y市国際大学とP A教授

H GはH Yを連れてD Aの紹介でY市にある国際大学を訪れた。

事務録の受付で「Y国際港駅商店街会長様から、こちらの理事長様と面会予定の碓屋のH Gと申します」と告げると、「碓屋のH G様ですね。理事長がお待ちしております」と奥の理事長室に通された。

「H G社長、初めましてY市国際大学理事長のA Cです」

理事長室のソファーには、理事長のA Cの他に白衣を着た女性が居た。

「初めまして、応用化学学科のP Aです」

と挨拶をした。

「初めまして、Y国際港駅商店街会長D Aからの紹介で来ました、碓屋の社長H Gです。彼

女は当社エージェントのH Yです」

「初めまして、H Yと申します」

と、言ってお互い名刺交換をする。

「まあ、おかけください」

と言われ、H GとH Yはソファーに座る。向かいに先程挨拶したP A教授が深刻そうな顔をしていた。H Gは要件を聞こうとしたが、先に理事長が口を開いた。

「『葛葉組』のD Aさんから聞きましたが、H G社長はD Aさんと同じ私の曾祖父の姉のI Nさんの曾孫だそうですね…屋号は何ですか？」

と、依頼の話より先に、H Gの出自について訪ねてきた。

H Gは「俺についての信用を確認してるな」と思い、応じた。

「はい、私の屋号は『白山亭』になります。もともと、今は『碓屋』ですが…、昔の『碓屋

“ではなく、“新生碓屋”ですが…”

とHGの今の屋号を名乗った。

「おお、“白山亭”さんですか、これはこれは…私は“学園長”です」

と言って、ACは笑った。

「“学園長”さんですか…お恥ずかしながら、私はA姓の方をA味噌醤油店の社長以外知りません…いや、曾祖母の甥に当たる方がY海軍基地の軍学校の機関科の学部長に居たと聞いていたくらいです…」

「そうでしたか、A姓はA味噌醤油店が“本家”、Y海軍基地の軍学校の機関科の学部長だった方の子孫の家は“海軍機関学校”、現Y市立高校の理事は“高校理事”と…まんまですよ」

「教えていただき、ありがとうございます」

と、HGは頭を下げた。そのやり取りを横で聞いていたHYは、チンプンカンプンで

「あの一、准尉」

とHGの袖を引っ張り、

「“屋号”って何ですか？」

と訊ねると、ACが

「“屋号”と言うのは、同族の人達がそれぞれの一家を名乗る場合に同じ姓だと分からなくなるし、また名前も単に一般的な“T”だけだと他にも同じ人が居たりしてもっと紛らわしくなるので、“屋号”という名をそれぞれつけて“〇〇屋のT”とか名乗る事ですよ。騎士の家系だと領地の土地の名前とか、商家なら商売の名前とかを良く使います。特にHGさんの家系は曾祖母のINさんご自身が3回結婚して子供が多く、より複雑なのでお互い屋号で呼び合う習慣があります」

「教えていただき、ありがとうございます」

と言って、HYは頭を下げた。「確かに准尉の一族の方々って結束力高いし、姓もD、J、Iの他に女性の方は結婚されて姓が変わった方も居るので、未だに覚えきれてないわ…この前も商店街で買い物して、焼き鳥屋さんの女将さんと話をしたら実はD姓の方で結婚してN姓だったり…」

「彼女は利発そうなお嬢さんですね。エージェントと言いましたから、それなりの腕前がありそうですね」

とACが言うと、HYは「(また特別銃器携帯・使用許可証を見せなきゃなんないの?)」と嫌そうな顔をした。〔巻き込まれ親父の突入〕参照〕

HGはHYの心配をよそに、依頼について訪ねた。

「葛葉組のDAさんから、お話を伺いましたが、本人が理解しておらず、何を言ってるのか…『最新の研究結果が外部に流出しているらしい』とか、『大学の研究室に何者が入り込んだ形跡とかあった』とか、『サンプルが偽物とすり替わっていた』とか…」

「それにつきまして、こちらに居るPA教授から話をさせていただきます」

とACは言った。

「本日は、おいでいただきありがとうございます。話と言うのは、実は私の研究室に度々泥棒が入り、研究室から私の研究している素材のサンプルが盗難されているのです」

「盗難？研究素材ですか？」

「はい、私が研究して開発した先端技術の素材です」

「具体的には？」

「新素材の繊維とかです、他にもありますが、学会に論文発表するが一番近い物です」

「新素材の繊維ですか…それでDAさんが『サンプルが偽物とすり替わった』と言っていた

訳ですね？」

「はい、この論文発表前の新素材について、これを使った製品を作って製造法の特許を取り、私と大学の研究成果を横取りしようとする者がいるらしいのです」

「それは確かに心配ですね…折角苦勞して開発したモノを盗まれてその成果も横取りされては…」

「はい」

「そう言う事ですか。その研究成果の横取りを狙っている人や企業に心当たりは？」

「色々心当たりがあります。最近では、△×△と言うベンチャー企業が共同研究助成金活用の話を持ちかけ、接触して来ました。それ以外の大手企業とか…その内のいくつかはどうも私の研究室の学生を買収して使っているようでして…」

「ちなみに、盗まれた素材と言うのは？」

「これから論文発表する素材になる前の素材です。新素材への原料となる更に前の素材です。新素材はまだ盗まれていません」

「成程…すると我々に対する依頼は、P A教授あなたの警護でしょうか、それとも研究室にある新素材のサンプルや実験データや、論文の警護でしょうか」

「できれば、両方です」

「研究室の警護は、大学の警備員では足りませんか？」

「警備会社では心許無く…実はまだ警察に話してないのですが、先日泥棒が研究室に入ろうとして、警備員が見つけたのですが、銃撃を受けまして…幸い警備員には当たりませんでした、この話をして警察が研究室に入り込んで研究を邪魔されとか、貴重な論文やサンプルを警察に一時押収されて論文の発表が遅れるのは防ぎたいと考えていまして」

「『先日も』とおっしゃいましたが、過去にもあったようですね…何回あったのですか？」

「はい、これまで2回ありました」

「そうですか、その論文の発表は何時頃ですか？」

「3か月後に帝都大学で行われます。その前に学会誌で論文が公開されます」

「学会誌への入稿の締め切りは？」

「1か月後です。そのため、私はほぼ研究室に泊まり込んでいます。家には入浴と洗濯をしに帰っています…あと家に待っている子が居ますので…私は論文作成の邪魔を誰にもされたくないのです…この依頼受けていただけませんかでしょうか？」

「差し支えなければ、現在教授の研究について、お話願いますか…出来れば簡単に」

「現在研究しているのは、人の体温で発電する繊維です。これにより、人が着ているインナー等を電源として、それに取り付けた各種センサーを駆動して体調管理をする事を目的としています。将来はスマートフォンの充電が出来るくらいの電圧が出せればいいかと考えています」

「服に取り付けたセンサー類の駆動を自分の体温で賄うのか…それは素晴らしいですね。私は毎朝体力維持にトレーニングをしています。そう言った時の脈拍や血圧のデータを現在はこのスマートウォッチで収集していますが、それを自分の体温で発生させた電気で賄えれば、楽ですな」

「そうですね…他にも寝たきり老人の監視とか、応用はいくらでも考えられます」
と言って、P A教授は笑った。

「一応、ご確認させていただきますが、ご依頼の期限は？」

「私が今の論文を帝都大学で行われる学会発表までです」

「そうですか…分かりました。学会発表までの間のP A教授と研究室の警護を致しましょう…ただし、その間に企業でP A教授の研究成果を横取りした論文の発表や特許が取られなくても、当社は関与できません…専門外ですので」

「それで構いません」

「それから、ご依頼はP A教授の周り全ての方が不審に思われているようですので、潜入捜査と言う事になりますね」

「そうですね」

「それが、ご心配なので、わざわざ私の屋号を確認したのですね。A C理事長？」

「はい…バレましたか、血縁者なら信用できますので…」

「わかりました。取り敢えず私達は帰ります。誰を警護につけるかは、追って連絡いたします。お忙しい所、お時間をいただきましてありがとうございます」

とH Gが言うと、P A教授は

「では、私は研究室に戻ります」

と言って席を立った。

P A教授は、理事長室を出て行った。

「では、A C理事長」

「はい」

「依頼の内容の確認と、料金について話をしましょう」

とH Gが言うと、

「そうですね」

と言った。

●さて…適任者は

H Gは依頼を受けることにして、誰を任務に就かせようかと考えた。

任務先が大学の研究室なので、理系の知識が必要と考えたと、理系大学出身のH Yが妥当だと考えるが、T YやI Yにも経験を積ませたい。P A教授の新素材を狙っている相手は、銃を持っているので、“特別銃器携帯・使用許可証”をまだ持っていないI Aは使えない…依頼がP A教授本人と、P A教授の研究室の2つなので、2人を当てるとすると…誰をどちらに…

白山亭店内…

H Gは、夜のP u b営業前に、H Y、T Y、I Y、I Aを集めて、A C理事長からの依頼を伝えた後、

「H Yは、確か大学では通信工学だったよな…」

「そうです」

「T Yは…えーと」

「応用化学です」

「I Yは？」

「私はD国文学部です」

「I Aは」

「機械工学部です」

H GはT Yが理系大学出身者と言う事を忘れていた。

「T Yが適任だな」

「わたしですか？」

TYは自分を指さして驚いた。

「依頼は、新素材の繊維を研究している大学の教授だから、適任だと俺は思うが」

「ならば、私でしょう！」

と言って、得意になる。それを見てIYが

「准尉！私も！」

と言うと、HGは

「IY、お前が一番適任じゃないぞ：依頼は教授の護衛と新素材の研究資料だ：しかもPA教授の研究室に潜入するんだ、研究資料が盗まれたり擦り替えられたか分からないと任務が務まらないぞ」

「えー」

HGとIYのやり取りを聞いたTYは、

「准尉、潜入捜査と言う事ですか？」

「そうだ、TY。PA教授は自身の研究室に居る学生の事も信用できなくなっているらしい：PA教授の研究室にPA教授の論文作成の校正要員として入り込む事にした」

「えー、大丈夫でしょうか？」

とTYが躊躇していると、

「だから、お前が適任なんだよ。思い出したが、民兵会社時代に面談した時、大学院に進もうとしたが、親に諦めるように言われて苦労したんだろ？また、就職も地方銀行に決まったら、親から軍か民兵会社じゃなければ駄目だと言われたんだよな」

「そうですね：論文は：修士論文以後書いてませんし：」

「お前、出来る事でも二の足を踏む癖があるな、F県領地の斥候の件といい：一度吹っ切れると、とんでもない行動力を発揮する癖に：」

「ハア…」

「行ってこい！お前なら出来る」

「はい」

「あの一准尉」

「なんだI Y」

「論文の校正と言うのなら、学会誌の掲載するのはA国語かD国語ですよね？」

「何だと？」

「世界的に有名な学会誌はA国語とD国語で掲載されますよ」

「…そうなの？でも、帝都大学で行われる学会発表は皇国語だろ？」

「そうですけど…学会誌はA国語かD国語で入稿しないと受け付けられませんよ」

「…なんでそう言う事知ってる？」

「はい、実家の父（B侯爵）は、皇国の学会誌編集に携わっていて、教えて頂いたことがあります」

「なるほどね…で、お前さんは何が言いたい」

「はい、私はD国語文学を大学で専攻していましたから、皇国語をD国語に翻訳が出来ます…話したり聞いたりする方はダメですが…」

「専門用語は訳せんだろ？」

「…それは、T Y先輩にお願いして解説して貰えば…」

「わたしだよりかい！」

「ダメですか？」

と言って、H Y並みに上目遣いでH Gにおねだりするが、H Gはキッパリ、

「ダメ！」

「ハイ…」

I Yはシュンとして項垂れた。

「H Y」

「はい」

「お前は、研究資料だ。研究資料はP A教授の大学の研究室にあるのは、説明受けたよな」

「はい」

「新素材の研究成果を狙っている相手は、銃を所持している。各自拳銃を携帯しろ！…それから防弾ベストの着用」

「はい」

「I Y、I A」

「はい」

「二人は、連絡要員として待機。もしかすると大学内での聞き込みとか、頼むかもしれん」

「「ハイ！」」

「准尉？」

「なんだH Y」

「大学理事長さんから聞いた話だと、わたしはP A教授の研究室に張り付くのでしょうか…？」

「そうなるな」

「…あのー、わたし独りだと…」

H Yは母屋の霊達の一件以来、そういったモノが苦手な度合いが一層強くなっていた（巻き込まれ親父の鎮魂」参照）。I Yは、H Yの言葉から「（大学とか学校の類って、そういうモノが多いし、ここ（母屋）と違って好意的じゃない方々も居るから、H Y先輩余計怖がつてるな…」と感じて、

「私がH Y先輩と行きます！」

と言ったが、H Gは

「H Y：夜は警備員が居るから、巡回の頻度を増やしてもらうように言っておく」

と言ったので、H YとI Yはそれぞれ別の意味でシュンとした。

●P A教授

A C理事長に案内されて、H GとT Yは大学の実験棟に向かい、P A教授の居る応用化学素材研究室に行った。

「P A教授、居ますか？」

と研究室のドアを開けてA C理事長が言うと、如何にも化学の実験施設が所狭しと並ぶ室内に学生が居て実験をしている研究室の奥から返事がして、学生と実験施設の間をすり抜ける様に、長身で細身のP A教授が出てきた。

「理事長、なにか？」

「P A教授、お話があります。少しお時間を頂けますか？」

と言うA C理事長の後ろに居るH G達姿を見て、P A教授は

「あつ、はい分かりました」

と言って、後ろにいる学生達に

「ちよつと、席を外します。すぐに帰ってくるので、実験を続けていて下さい」

「はい」

A C理事長はP A教授とH G達を連れて、実験棟のラウンジに行くと、そこにある自動販売機でそれぞれ飲み物を購入してテーブル席につくと、A C理事長が

「P A教授、こちらの方々は、エージェント派遣業碇屋さんからあなたに就く警護のT Yさ

ん」

「TYです、初めまして」

「初めまして、PAと申します」

とそれぞれ挨拶した。HGは手短に

「早速ですが、現在研究されている素材の論文発表についてですが、昨日の話では、学会誌への入稿があと一か月と聞いておりますが…」

「はい」

「進捗はどうですか？」

「はい、今のところ順調に進んでいます」

「論文は皇国語ですか？」

「3か月後の皇国大学での発表は皇国語ですが、学会誌に掲載される論文は、A国語かD国語に限定されます」

それを聞いたHGは「(IYの言ってた通りだ…)」とIYを見直した。しかし、

「困りましたね…ここに居る彼女は応用化学部を大学で履修して、大学院に進むまでの成績でしたが、ご両親に反対されて大学院進学を断念しました。論文がA国語かD国語ですと…私は、彼女を論文編纂作業か校正作業要員として大学側で臨時雇用した人物として研究室に入れようと思いましたが…」

「うーん、そうですね…その話ですと、今入稿用の論文の作業はできませんねえ…私はD国語で作成しているので…どなたかD国語が出来る方がいらつしやいませんか？」

「当社にD国語が読み書きできるのは、一人居るには居ますが…学術用語がうまく翻訳できるのが心配で今日は連れてきていません」

「D国語が出来る方が居るのですか？」

「はい…彼女は大学でD国文学を専攻していたそうで、D国文学の言い回しならともかく、

技術用語の言い回しは分からないと思います」

「いえ…大丈夫です」

「？」

「私は、どちらかと言うと、文章の“てにおは”をチェックしていただける方が必要ですから」

と言って、P A教授はH Gに縋るような目線を送った。

「…」

H Gが黙り込んでいると、P A教授はD 国語が出来る人材（I Y）を派遣して欲しくて、「では、そのI Yさんには、私の論文に掲載する分子モデルとか図や表の清書とか、3 か月後の学会発表用の原稿の校正要員として大学側が雇った人と言う事にしましょう。学術誌の論文には、そのD 国語が出来る方をお願いします」

「…しかし」

と言って、H Gが躊躇うと、P A教授はH Gを急かす様に

「こういったモノは、知っている人が翻訳するより、知らない人がやる方が新たな気づきがあったりするものです。その人が翻訳したものを私が校正します」

「それでは、教授の負担が」

なおも躊躇うH Gに、

「ダメでしょうか？」

P A教授のすぎるような目に、H Gは目線を合わさず、

「残念ながら…」

と一言。それを聞いてP A教授は項垂れて

「…そうですか」

● T Y 潜入

P A 教授が T Y を連れて研究室に戻ると、

「みなさん、チョット手を止めてくれるかしら：こちら、私の論文作成に校正要員として理事長が雇って下さった T Y さんです」

「T Y です。よろしくお願いいたします」

と、挨拶すると、

「わたしは P A 教授と共同研究をしている助教授の G M です。よろしく」

「俺は、この研究室の大学院生の A R だ。ヨロシク」

「あたしは、この研究室の研究生、4 回生の T S よ。よろしくね」

「同じく僕は、この研究室の研究生、4 回生の N M です。よろしく」

と自己紹介をした。P A 教授は続けて

「彼女には、私の論文に掲載する分子モデルとか図や表の清書とか、3 か月後の学会発表用の原稿の校正要員として私と行動を共にしていただきます。あと、理事長には D 国語ができる方をお願いしています」

それを聞いた T Y は「（あれ？そんな事聞いてないよー）」と思った。

T Y は研究室の奥で、P A 教授がまとめている資料を見始めた。資料を見ながら、T Y は P A 教授と G M 助教授に質問をしながら資料をまとめたり、清書したりしていた。

P A 教授の研究室には、教授が研究している新素材に関わっているのは、先程紹介された 4 人。後、P A 教授が授業を受け持っている繊維素材基礎工学の講義を受講して教授に講義のレポートを提出に来る学生達：P A 教授が優しい性格のせいか、学生達に好かれていて、レポートを提出しても教授や助教授や研究生と話をして入り浸り、なかなか帰らない。そのため教授の論文作成の手がしばしば止まっていた。

TYはそれを見て「(教授が毎日研究室に泊まり込んでいるのは、昼間学生達が入り浸っているせいじゃないの?)」と思った。

「教授、学生達に慕われているのは分かりますが、ここは論文入稿まで、人の出入りを制限するとかしないと、教授の学会誌入稿用の論文の締め切りに間に合いませんし、教授の新素材を狙っている者の入室が判らなくなります」

とTYが苦言を言うと、PA教授は

「でも…皆私を慕ってきてくれてるんだし…将来私の研究室に来てくれるかもしれないし…でも、今は学会誌の入稿と学会の発表が優先よね…」

と言って、PA教授はシュンとした。

学生達が帰った後、研究室にはPA教授と助教授とTYが残った。

TYは、PA教授と助教授に話を聞きながら論文発表資料を整理ならびに清書を行った。

TYはPA教授の論文原稿を見ながら、不明点を的確に質問しているので、PA教授はTYに感心していた。

すっかり日が暮れて、

「では、わたしはこれで今日は帰ります。PA教授…無理なさらないでください…それからTYさんも初日から飛ばすと最後まで持ちませんので、程々に…」

とGM助教授がロッカーの前で白衣から背広に着替えながら、PA教授とTYに声をかけた。

「はい、ありがとうございます」

「じゃ、GMさん明日もよろしくね」

「はい」

と言って、G M教授は研究室を後にした。

それから宵の口になり、

「それでは、今日は一旦帰宅します。家まで警護をお願いします。T Yさん」

「はい」

P A教授が研究室の鍵を閉め、T Yと共に1階の警備室に来ると、警備室の中に警備員の格好をしたH Yが居た。

T YはH Yの姿を見て、一瞬吹き出しそうになったが、気を取り直して

「H Y先輩…よく似合いますよ」

「T Y、今笑おうとしたでしょ！」

「いいえ…」

と話をしていると。

「あら、H Yさん」

とP A教授が会話に入ってきた。それにT Yは

「はい、教授が帰宅している間は、彼女が研究室を警備します」

「ありがとうございます。なるべく早く戻ってきますね」

「はい」

道すがら

「T Yさん、あなた今日一日で私の論文をよく読んで、的確な質問をしてくださり、ありがとうございます…本当に校正・編集の方と話をしているみたいです」

「おほめ頂きまして、ありがとうございます」

「ホントにH G社長は、適任者をよこしてくださってありがたいです…TYさんがこれだけ有能ですと、そのD国語に翻訳できる方も優秀な方なのでしょよね？」

「D国語？…ああ、I Yの事ですか…彼女はD国語文学を大学で専攻したそうです。教授の学会誌の論文がA国語かD国語じゃないと掲載されないことをわたし達に教えてくれたのも彼女ですが…教授の論文をD国語に翻訳する事に自ら手を挙げましたが、彼女はD国語文学ができて、学術的な理論や専門用語をD国語に翻訳するには力不足で…社長が彼女を翻訳に参加させることには反対しています」

「…そうですか」

と言って、P A教授はシュンとした。

●犬嫌い

夜、TYがP A教授とP A教授のアパートに一時帰宅すると、玄関に大きな犬が出迎えて、P A教授に抱きついて尻尾を振っていた

「よしよし、今日もお留守番ご苦労様…ごめんね、構ってあげられなくて、もう少ししたら早く帰れるようになるから我慢してね」

と言って、犬の頭を撫でる。TYはそれを見て、アパートの玄関扉に張り付くように後ずさりした。それに気づいてP A教授は

「怖くないですよ、この子体は大きいですが、優しくておとなしいですよ」

とP A教授が言っても、TYは首を横に振って玄関ドアから離れようとしな…P A教授は

「ワンちゃん嫌いですか？」

と訊ねると、TYは

「ハイ…スミマセン、子供の頃犬に噛まれた事があって…それ以来怖くなりました…」

「そうでしたか…それでは無理強いはできませんね」

と言って、P A教授は犬にリードを付けると、

「この子の名前は、Wちゃんと言います…Wちゃん、このおねえさん、ワンちゃんが苦手だそうだから、近寄っちゃ駄目よ」

「ワン！」

白山亭店内…

TYはP A教授の犬の事をHGに報告した。HGはそれを聞いて

「教授が毎日帰宅する理由は、それか…お前が大嫌い」と記憶はしているが、克服したんじゃないかったつけ？」

『それは、小さな犬ならば…と言う事です。教授の家には大きなのが居るんです』

少しヒステリックな声でTYが言う。

「…うーん、どうしよう」

と言って、HGはそこに居るI YとI Aに

「P A教授のアパートに大型犬が居て、TYが怖がっている。どちらかサポートに入れないか？」

と訊ねると、二人供「ハイ！」と言って、挙手した。

「ワンちゃん大好きです。実家で飼っています」

とI Aが言うと、I Yは

「私の実家でも大型犬を飼っています」

とそれぞれ、自己アピールをした。

「I Aの家で飼っている犬の種類は？」

「皇国で一般的な中型犬です」

「I Yは？」

「愛玩用としてのS国的大型牧羊犬とか、番犬としてD国とかE国の猟犬数匹です」

「…そうか」

H Gは「(H Yは幽霊が怖くて夜の研究室の警備に支障があり、T YはP A教授の飼っている犬が怖い…か、適任者が他の要因で任務に支障が出るのは、困ったな)」と思って、腕を組んで考え込んでいると、

「准尉、私今日はこれで上がります…って、どうかしたのですか？」

と帰宅するT Tが声をかけて来た。

「あ、T Tか…実は…」

と言つて、H GはT TにH YとT Yの事について話をする、

「あら…T Yって犬が苦手なんですね。H Yが幽霊怖がるのは知ってましたが」

と言った。

「二人供苦手なモノがある場所で任務に就かせて支障がある…でも代わりにI YとI Aと交代させても…」

「なら、T YとH Yにそれぞれバックアップを付けたらどうです？」

「人件費的な物と、この店の女給のシフトはどうする？」

「女給のシフトは、私が何とかします。今までそうでしたから…H Yは夜間だけだし…流石に人件費的な物は…どうしようもありませんねえ、でも、この任務新規のお客様ですから、初回サービスと言うのはどうです？」

「一人当たりの人件費で二人を使うのか？」

「そうです」

「しよーがねえーな」

それを聞いたTTは「まだ『めんどくせー』、ではないのですね」と思った。

「わかった！IY」

「はい」

「お前は、TYのサポート。くれぐも、PA教授のレポートの手伝いはしない事！」

「はい」

「IA」

「はい」

「お前はHYのサポート」

「ハイ准尉」

「二人供、すぐ行け、向こうの二人が怖がっているから」

「「ハイ！」」

IYとIAはウキウキして着替えるために母屋に行った。

「…やれやれ、大変ですね准尉」

とTTが呆れて言うと、HGはため息をついて、

「TT、ありがとう。お前さんが言ってくれなかったら、踏ん切りがつかなかったよ」

「あら、どういたしまして」

●夜の研究棟

IAがY国際大学の実験棟に着くと、守衛室に警備員の姿をしたHYが待っていた。

「IAも、これに着替えて、PA教授はTYと家に一時帰宅したから、研究室は今無人なの、早く着替えてね」

と警備員服を渡される。

「はい、HY先輩」

やがて、警備員服に着替えたI Aを連れて、H YはP A教授の居る研究室が見える位置に張り込んだ。

「H Y先輩、人影が…」

「ホントだ」

P A教授の研究室に来て、鍵を開けようとする人物が見えた。

「…P A教授ではないですね…」

「そうね、P A教授ならT Yが側に居るものね。チョットいつてくる。I Aバックアップお願い」

「はいな…じゃなくて、H Y先輩」

H Yは静かに不審者に近づき、相手の間合いの外から

「どうかしましたか？」

と声をかけた。相手は驚いて

「誰だ！」

と言ったが、警備員の服を着たH Yの姿を見ると、慌てて

「あつ、ああ…わっ忘れ物を取りに来ました」

「こんな時間にですか？」

「じゅっ…授業のレポートを中に忘れたんだ」

「そうでしたか、当大学の学生さんですよね…一応学生証を拝見出来ますか？任務ですの
で」

と言って、手を出した。

相手はポケットから学生証を取り出した。H Yはそれを確認すると。

「この研究室の人ですか？」

と得意の上目使いで訊ねる。相手はドキッとして（オイオイ！作者）、

「はい、P A教授の研究室の4回生のNMです」

と答えると、

「ちなみに、鍵は？」

「下の警備室で借りてきました」

HYがトランシーバーで警備室に確認すると、確かにその名前の学生に鍵を貸したとの確認が取れた。

「疑ってスミマセン…ご存じの様にP A教授の研究室で盗難事件が続いているので、警戒を強化しています。できれば一緒に研究室の中に入っていいでしょうか？」

「はい、いいですよ」

HYはNMとP A教授の研究室に入った。

「そう言えば、P A教授は今日はいませんか」

と言って、NMは研究室の照明のスイッチを入れた。

「P A教授は、今は一時帰宅されたと聞いています」

とHYが言うと、NMは

「あつ、教授のワンちゃんのお世話に帰ったのかな？あの子賢くて可愛いですから…」

「そうなんですか？（確か…TY犬嫌いだったわよね…大丈夫かしら？）わたし最近「この警備に派遣されたもので」

と言うと、NMは、ポケットからスマートフォンを出して

「写真見ますか？」

「いいんですか？」

NMはスマートフォンでP A教授と愛犬Wの写真を見せた。

「おっきな犬ですねえ…でも可愛い！」

「でしょ、僕が教授の家にお邪魔した時にこの写真撮りました」

と言って、NMは笑った。それを見て「(泥棒ではないよね)」とHYは思った。

NMは研究室のテーブル上から、クリアファイルを手に取り、

「あつた…やっぱりここか…見つかりました警備員さん」

「良かったですね。では出ましょうか」

「はい」

探し物が見つかって余裕が出来たのか、NMはHYに対して

「君、この歳で警備員のアルバイトをしているんだ」

といきなりタメ口で話し始めた。NMは小柄で童顔のHYを学生のアルバイトと勘違いしたようだ。

「はい、警備会社からこのPA教授の研究室で盗難が相次いでいるとの事で、警戒強化のために臨時で雇われました」

「そうなんだね…」

「今度、お茶でもどう？」

「ええー？」「(ナンパキター)」困りますう…仕事中ですので」

「また、会えるといいな」

「…はい」

出口に向かうNMと反対の方向にHYは歩いて行き、IAが隠れている廊下の曲がり角に入った。

「HY先輩どうでしたか？」

「ホンモノのPA教授の研究生だったわ…彼からPA教授の犬の写真見せて貰ったけど、

おっきな犬ねー、TYあれじゃ困ってるでしょ」

「そんなに？」

「うん…私より大きいと思う」

「そうなんですか（IAの脳裏には、犬の着ぐるみを着たHYの姿を想像しています（笑）作者）」

「それから、ナンパされちゃった！」

とHYが嬉しそうに言うと、IAは驚いて

「マジですか？」

「まあ、わたしは准尉一途だから…」

とHYが照れながら言うと、

「HY先輩、しょってますね…」

「うるさいわね！」

● IY、PA教授に拌み倒される

同時刻…

PA教授のアパートの部屋のドアフォンが鳴る。

PA教授がドアフォンのモニターを見ると、IYが写っていた。TYがそれを確認して

「同僚のIYです」

と言うと、PA教授はドアを開けた。

「初めまして、碓屋のIYと申します」

「PAです。初めまして」

「なんで、ここに来たの？」

「准尉の命令でサポートに来ました。TY先輩がワンちゃん嫌いなので…それから、D国

語の翻訳が出来る人が要るでしょうし…（こちらは、I Yの抜け駆けでH Gの指示ではありません。作者注）

「あら、あなたなの？ H G社長が言ってた、D 国語が出来る方って？」

「はい」

「まあ、上がって」

「お邪魔します」

と言って、I Yが部屋に上がると、P A教授の愛犬が飛びついてきた。T Yは驚いたが、I Yはそれを受け止め…切れずに押し倒されて顔を舐められた。

「よし、よし…嬉しいのねー歓迎してくれてありがとうねー」

と言って、舐められるまま、I YはWの頭を撫でていた。

「I Y大丈夫？」

心配するT Yに対して、

「この子賢いわ…大好きの人が見分けられるのね…T Y先輩には氣遣って近寄らなかったでしょ」

「…確かに！」

P A教授がWに餌を与えて、入浴ついでに洗濯機で洗濯をしている最中に、T YはI Yが白山亭から持って来た白山亭サンドウィッチと白山亭オリジナルコーヒーを前に、情報を交換していた。

「…で、准尉はあんたにP A教授の論文の手伝いを許可しなかったんだ」

「はい」

「だったら、なんで『D 国語の翻訳が出来る』だなんて…余計な事を言って！そもそも、なんで准尉はあんたをこっちによこしたんだろう…I Aでも良かったのでは？」

「…それは、多分私が『見える人』だからですよ」

「あっ！」

「私が『視えて』あれこれ言ったら、H Y先輩任務どころじゃなくなりますから」

「そーいう所、准尉はちゃんと考えているわね」

「はいそうですね」

と言つて、I Yは笑った。

風呂から上がってきたP A教授は、T Y達が食べている白山亭サンドウィッチを見て

「あら…美味しそうですね」

「教授、食べますか？わたし達のお店のサンドウィッチですが…」

「お店？」

「はい、わたし達の社長は、エージェント会社の他に『白山亭』と言つて喫茶店を經營しています。わたし達は任務が無い時はここで働いています」

「えっ？白山亭って言ったら、Y 国際港駅前の昔ながらの女給さんが給仕してくれる所よね」

「はい、わたし達その女給もしています」

「へえー、そうなんですね…前から行ってみようかと思つてたけど…」

「学会の発表が終わったら、いらしてください」

「そうね、いただいていいの？」

「はい、コーヒーもどうぞ」

と言つて、T Yはポットを持ち上げた。

3人は、白山亭サンドウィッチを食べながら話をしていた。

「I Yさん、D 国語がお出来になられるとか…」

「はい、読み書きだけです…」

「私の論文の翻訳手伝ってくれませんか？」

「そうしたいのは、やまやまですが…じゅ…いえ、社長からダメと言われてますので…」

「…そうですか…でも私D 国語の文章に不安があるの…手伝って貰えませんか？」

「いや…私の一存では…」

「D 国語が正しい言い回しになっているかどうか確認するだけでいいの！お願い」

PA 教授は手を合わせた。I Yは困ってTYを見るとTYは首を横に振った。I Yは困っているPA 教授が可哀想になり、

「判りました…自信がありませんが、私で役に立つのであれば」

とI Yが言うと、PA 教授は喜んだ。

「オイオイ、I Y大丈夫か？社長からダメだと言われてるでしょ！」

とTYが言うと

「ですが、教授が困っているようですし…」

と困り顔でI Yが言うと、TYは突き放した様に

「あくまでも、あんたの責任でやってよ！わたしを巻き込まないでね」

「はい」

● 4 人の容疑者

PA 教授が自宅から研究室にTYとI Yを連れて戻ると、研究室を警備していたHYとIAを研究室に入れた。

I Yが、PA 教授が作成した学会誌入稿用の原稿を読んでいる横で、TYとPA 教授はHYとIAを交えて話をしていた。

「…P A教授が帰宅中に忘れ物を取りに来た学生が居たんですね」

とT YがH Yの話から確認をすると、H Yが

「うん、ここの研究室の4回生のN Mと名乗ってたわ。『授業のレポートを中に忘れた』って…学生証見せて貰ったけど、本人の物だったし、この部屋の間取りも分かっている、忘れ物もすぐに見つかったし…」

「それが、却って怪しいかも…わざと授業のレポートを置いておいて、取りに来たフリで研究資料を盗み出そうとしたけど、H Y先輩に見つかって、授業のレポートだけ持って帰ったとか…」

とT Yが言うと、H Yは困って

「うーん、そう言われると…」

と口を濁した。

「じゃ、姐さんここの研究室に出入りして居る主な人は？」

とI Aが訊ねると

「助教授G M、院生A R、学生N M、学生T S…スマートフォンで撮った写真を共有するから、皆覚えてね」

と言って、T Yがスマートフォンの画像共有をすると、各自自分のスマートフォンを確認して、

「あつ、この男の子さつきレポート忘れたって来た子だわ」

「どれです？」

「このN Mって子。学生証もN Mだったし」

そのとき、

「教授、ここの表現って…？」

とIYが言うと、PA教授はIYの所に行って説明を始めた。それを見咎めたHYは

「IY！あんた准尉が駄目だって言った、論文翻訳やってるの？」

とHYがIYを叱ると、

「HY先輩、IYに言ってやってください…わたしも駄目だと言ったのですが、IYがどうしてもと言うので…」

「まあまあ…私のたつての依頼ですので、大目に見てはくれませんか…D国語が解る人が私の周辺に居ないもので…入稿できた暁には、私から別に報酬を支払いますからお許し願いますでしょうか？」

それを聞いて、HYはため息をついて、

「その作業はあくまでIYの責任でしてよね！わたし達は関係のない事にしてね」

「はい」

「そう言えば、教授の家には大きなワンちゃんが居るのですよね」

「はい、Wと言って賢くて優しい子です」

「もし、よろしければ昼間のお散歩をあたしに任せてくれませんか？」

「IA…あんた」

とTYが言うと、

「ワンちゃんは、日々の散歩をしないとストレスが溜まります。教授はここ数日散歩に連れ出していないので、いくら賢くて優しい子でもその内メンタルがやられますよ」

「…そうなんですよね…」

とPA教授が項垂れて言う。

「でも、あんたまだ特別銃器携帯・使用許可証持ってないから、銃持っていないじゃないの」とTYが言うと、

「姐さん、ワンちゃんのお散歩に銃は必要ないですよ」

「そうだけど…」

I Aの言葉にT Yが困った表情をすると、P A教授が

「あのー、お願いできますか？」

「はい、あたしとH Y先輩は、日中はお店に居るので、教授のお家でワンちゃんに会わせて頂ければ、やりますよ」

「嬉しいわ…じゃ明日家に帰るときについて来てね」

「ハイ！」

翌日…

P A教授が一時帰宅する時に、I Yは研究室に留まり、T YとI Aが付いてって、I Aが玄関口で昨日のI Y同様Wが飛びついてきて、I Aもそれを受け止め…切れずに押し倒されて顔を舐められた。

「ヨシヨシ…お出迎えアリガトーね、嬉しい嬉しいねー」

と言って、舐められるまま、I AもWの頭を撫でていた。

P A教授がWに餌を食べさせ、洗濯をしながら風呂に入っている間、I AはWを散歩に連れ出した。

WはI Aにすっかり懐いて、P A教授からアパートの合鍵を預かり、任務外の時間で白山亭店内での仕事が空いている時間に、Wを散歩に連れ出した。アパートの住人には、「P A教授がお忙しいので、その間お散歩を頼まりました」と言って、WもI Aに懐いているので、疑われなかった。

● Wのお手柄？

いつものようにI AがWを散歩に連れて行くと、大学に続く歩行者専用の裏通りで、GM助教授が数人にスーツ姿の男達と話をしているのを見かけた。

I Aが機転を利かせてWと物陰に隠れ、聞き耳を立てていると

『…新素材…論文…お金…』

と言う言葉が聞こえた。I Aは「なんか怪しいわね…」と思って、GM助教授とスーツ姿の男達が分かれたのを見て、

「Wちゃん…ごめんね。チョットオネーチャンと寄り道してね」

「ブン」

と言って、I Aはスーツ姿の男達をつけた。

幸いスーツ姿の男達は、傍の建物に入っていた。

I Aは建物の看板を見て

「××△インダストリー研究所？」

と記憶して、元の散歩道に戻ろうとしたら、Wが散歩道と別の方向にI Aを引っ張り出した。Wの力が強すぎでI Aが引っ張られていくと、そこにはI Aの知らない男性が居た。

Wはその男性に飛びつき、顔を舐め始めた。それを見てI Aは慌てて

「ゴメンナサイ！この子普段は優しくて賢い子なんです…直ぐに辞めさせます」

と言って、Wのリードを引っ張るが、Wは一向に男性から離れようとしな。逆に男性は

「なんだWじゃないか！ステイ！なんでここに居るの…って、あんた誰？」

と言いながら、Wが顔を舐めるのを辞めさせ、Wのリードを持っているI Aを見て驚いた。

「はっ、はい！あたしはY国際大学のPA教授からこの子の散歩を頼まれました。白山亭の従業員のI Aと申します」

「白山亭？ああ、Y国際港駅にある」

「はい」

「へえー、白山亭って、犬の散歩もやるんだ…」

「いつ、いえ私が個人的に頼まれたので」

「ああ、ゴメン。意地悪言って。Wがリードを任せたのなら、P A教授が信用出来る人だと分かっているよ」

と言って、男性は笑った。

「私は△×△と言うベンチャー企業の社長D Bと言います」

と自己紹介をすると、I Aは疑問に思って、

「この子の飼い主さんのP A教授の事ご存じで？」

と訊ねた。それを聞いてD Bは、

「ああ…P A教授とは大学での同期です。Wも私の家の子の一匹を貰っていただいた仲です」

と答えた。

「あら、Wちゃんの兄弟の飼い主さんですか」

「はい」

と笑って答えたD Bに、I Aは「(ベンチャー企業の△×△って…確かP A教授に共同研究助成金活用の話を持ちかけた会社って、准尉が言ってたけど…Wちゃんが甘えているし、Wちゃんの実家とも言ってるし…それにP A教授の事も知っているし…敵じゃなさそうね)」と考えた。

「ああ、折角の色男も台無しだ…」

とD Bは笑って、近くの公園にI AとWと共に行くと、水道の蛇口を捻り、顔を洗い出した。

ポケットからハンカチを出して顔を拭きながら、D BはI Aに

「まあ、掛けなさい」

と言って、D Bはベンチに腰掛け、I Aに横に座るように言った。

I Aは素直にベンチに座ると、

「君は、いったいあそこで何をしていたの？」

と単刀直入に訊ねた。I Aは一瞬「任務の事話していいのかなあ…」と考えて

「あのー、P A教授が最近学会発表でお忙しい事はご存じですか？」

と逆に質問をした。

「そのようだね…会社の役員が教授に会いに行って共同研究助成金活用の話を持ちかけた
ら、『学会で忙しいから後にしてくれ』みたいな事言われて追い返されてしまったそうだから」

と言ったので、I Aは「随分正直に言ったわね」と驚いて、

「それで、研究室に徹夜で論文作成しているので、Wちゃんがお散歩できないので、こうして頼まれています」

「そうなんだ…大変だね。根を詰めすぎて体調崩さないといいけど」

「あたしもそう思います」

「で、話を戻すけど、君はあそこで何を？Wの散歩道から外れているけど」

と再度訪ねてきた。I AはD Bがそこまで知っているのならP A教授の味方と考えて

「…正直に言います。実は散歩の途中でP A教授の助手のG M助教授が数人のスーツ姿の男達と話をしている、『…新素材…論文…お金…』と言う言葉が聞こえたので、不審に思っ
てその男達の後を追ってきたら、〃××△インダストリー研究所〃と言う建物に入っ
ったのを見ました」

「そうだったのか…素直に教えてくれてありがとう。あそこは私も実は見張っていたんだ
…G M助教授と接点があったなんて」

「？」

「ま、これは仕事の話しだからな…いや、教えてくれてありがとう…じゃ、Wまたね。P A教授が忙しくなくなったら、家に遊びにおいで、お前の親と兄弟が待ってるよ」

と言つて、D BはWの顔をワシワシヤと撫でた。

「ヲン！」

I AはD Bと別れて、WをP A教授の家に戻すと、その足でY国際大学のP A教授の研究室に行った。

「あら、I Aさん。Wの散歩は？」

「はい、終わりましたよ。それでですね…」

と言いかけて、研究室の中にG M助教授の姿を見かけると。

「あのーチョットよろしいですか？ Wちゃんのご兄弟の事で…」

と言うと、P A教授は

「あら、なに。いいわよ。じゃラウンジでお話しましよ、T Yさん」

「はい」

I AはP A教授とT Yと実験棟のラウンジに行き、I AがWの散歩の途中で見たG M助教授とD Bの話をした。

「I A、ベンチャー企業△×△って…P A教授に共同研究助成金活用の話を持ちかけた会社って、確か准尉が言ってたけど…」

とT Yが言うと、I Aは困った様に

「うん、Wちゃんが甘えていたので、信用できるかなあ…と思ったの」

「ホントかよ」

T Yの疑いを晴らすように、P A教授が

「D Bさんは、確かにWの親と兄弟の飼い主さんよ。私の大学時代の同期で、ご両親も会社

を経営していて、良く知ってるわ」

「そうですか…と言う事は、ベンチャー企業△×△の事は？」

「ごめんなさい、初めて知ったわ…まさかDBがベンチャー企業△×△の社長だなんて…早く言ってくれば良かったのにいーもう、あの人ったら！」

と言ってPA教授はむくれた。それを見たTYとIAは「（これは完全に…恋仲だ…味方確定ね）」と思った。

「…すると、ベンチャー企業△×△が教授の研究を狙っていると言う事は？」

「どうでしょ？あの人もビジネスにどん欲だから…でも、あの人だったら共同研究の話に乗っても良かったのに」

「（あら…そうですか）」

「では、GM助教授と××△インダストリーの線は？」

とIAがTYに訊ねると、

「…怪しいわね」

TYは首を傾げて言う、

「盗まれたサンプルは、わざと偽物を渡したと言う事になりますね。GM助教授が新素材のサンプルを間違えるはずないし」

「そうよね」

IAの言葉にTYは頷いた。

「じゃ、警備員が撃たれたというのは…」

「…おそらく、GM助教授が偽物を渡した事に気づいて、自ら研究所に盗みに来たのでは？」

「あの男達ですか？」

「だろうね。GM助教授なら、警備員から鍵借りて堂々と研究室に入るものね」

TYとIAは自然にHGの親父モードみたいな会話をしていた。

「じゃ、再度GM助教授に接触していたのは？」

「あたし達の事気づかれたのでは？ 姐さん」

「…うーん、そうかも…日中は教授と学生達とわたし達が居るし、教授が一旦家に帰っても、IYが研究室に居るし、HY先輩とあんたも居るしね…いつも誰か研究室に居るから盗みに入りづらくなって、再度GM教授に依頼したのでは？」

「あり得ますね」

「…と言う事は、わたし達が、教授が学会誌に入稿するのと、学会発表が終わるまで、こうしている他には無いわね。IAこの事を准尉に伝えて」

「はいな姐さん」

●事件発生

IAは白山亭に戻るとHGに今まで事とTY達との話を報告した。それを聞いたHGは「成程…俺はTYの考えを支持する。その作戦で続けてくれ。それからよくやってくれたI

A」

「いや…偶然です。Wちゃんのお手柄です」

と言って、IAは照れた。

IAが女給服に着替えて店内で仕事をしていると、同じく女給姿のHYに呼び止められ、

「IYはどうしてる？」

「相変わらず、PA教授の論文の翻訳に夢中で…さっきの話にもIYは参加してません…でもそれが却って抑止力になっているようなので…」

「うーん、准尉に聞かれるまで黙っていようね」

「はいHY先輩」

そうしてある日の深夜、P A教授とI YがD国語論文作成を頑張り、T Yが掲載する図と表を清書したので、学会誌入稿数日前に、論文が完成した。

「やったー！終わったわ」

「教授、完成しましたね！」

「後は…学会誌のサーバーにアップロードするだけ…ホントはG M助教授のサインが要るけど、明日追加でアップロードすれば済むわ…それが終わったら、私の家で打ち上げパーティーをしましょうね」

「はい」

P A教授はネットワークにアクセスを始めた。それを見てT Yは

「わたしチョット、トイレに…」

と言って、研究室を出て行った。

P A教授が学会誌の入稿用のサーバーに論文をアップロードしようとしたが、何故かネットに接続できなくなっていた。

「あら、どうしましょ…一刻も早く入稿したいのに…仕方ないわね、別棟のネット回線になげでアップロードしましょう」

と言って、論文が入ったノートパソコンを持って、別棟に移動した。

I Yは連日の疲れの為に、机に突っ伏していた。

その時、廊下から女性の叫び声が聞こえた。その声にI Yは飛び起きて、廊下に出ると、P A教授が倒れていた。

「教授！どうしました？」

I YがP A教授を抱き起すと、P A教授は気絶していた。I YはP A教授を揺ると、P

A教授は気が付いた。

「私…」

と言って、P A教授はI Yの顔を認めると、

「I Yさん、私どうしたの？」

「廊下で倒れていましたよ」

「…廊下…そうだ私、論文を学会誌の入稿用のサーバーに論文をアップロードするのに、別棟にいかうとして…あつ、P C！」

と言って、P A教授はノートパソコンを探すが、どこにも見当たらない。

その時になって、T Yがトイレから戻ってきて、I Yに抱きかかえられたP A教授を見つけて、

「I Yどうしたの？」

「P A教授が廊下で倒れていまして…論文が入ったノートパソコンが奪われたらしいです」

「何だつて!!」

「下に来ているはずのH Y先輩に連絡します」

「頼む！私は追いかける」

と言って、T Yは実験棟の出口に向かって走り出した。I Yはスマートフォンで下の守衛室に居るはずのH Yに連絡する。

『なにI Y？』

「教授のノートパソコンが奪われました。実験棟を至急閉鎖してください」

『わかった!』

H Yは守衛室に居る警備員に頼んで、実験棟の入り口のシャッターを閉じた。その時、実験棟内で銃声が響いた。

H Yは拳銃を抜いて、薄暗い実験棟の中を銃声のする方向に向かった。

H Yが、銃声が聞こえた2階の昇降口に着いて、拳銃を構えて周囲を伺いながら、進んでいくと、廊下の曲がり角で拳銃を構えているT Yの姿を認めた。

「T Y…」

「あ、H Y先輩」

「どうしたの？」

「教授のノートパソコンを盗んだ賊らしき人物を追い詰めたのですが、いきなり発砲してきて…」

「怪我は？」

「ありません、相手もこの暗さで当てずっぽうで撃ったみたいで…」

「どこ？」

「あの先」

「じゃ、わたしが突っ込むから、援護お願い」

「はい、気を付けて」

「行くわよ」

H Yは拳銃を構えて、T Yを追い越し、廊下を進んだ。T Yは曲がり角から拳銃を構えて突入するH Yの援護射撃の体制をとるが、相手は撃ってこなかった。

「T Y、来て！」

H Yの呼ぶ声にT Yが向かうと、2階の窓が開いていて、カーテンが揺れていた。それを見て

「逃げられましたね」

とT Yが言うと、

「そのよね…何があったの？ノートパソコンが奪われたってIYが言ってたけど」

「…実は…」

TYはPA教授の研究室であつた事を話した。

「油断したわね…論文が完成して安堵した隙を突かれたわ…」

と言って、HYはため息をつく

「IYは？」

「教授を介抱しています」

「そう…行きましょう」

「はい」

HY達がPA教授の研究室に着くと、中で椅子に座って項垂れているPA教授と、それに水の入ったコップを差し出しているIYの姿があつた。

「IY！」

「はい」

「どうしたの？」

「はい、TY先輩がトイレに行って、私が疲れて机に伏せている間に教授がノートパソコンを持って廊下に出たところ、賊に襲われたようです…多分スタンガンだと…」

「…えっ？二人供、目を離したって事！」

「「ハイ」」

「何やってんのよ！！」

HYの怒声に、PA教授が

「HYさん、私が論文のアップロードを焦ったばかりに…この二人を責めないで下さい」

「教授、どうしてノートパソコンを持ち出したのですか？」

HYは語気を荒げながら訊ねると、

「はい、論文のアップロードをするために、そのHUBにLANケーブルを差し、学会誌の入稿用のサーバーにアクセスしたら、繋がらなくて…ですので、別棟のネットワークならつながるかと思ひまして…」

とPA教授が言うと、HYはPA教授が示したスイッチングHUBを見た。

「外部からのアクセスランプは点いているわね…」

と言って、HYは廊下に出て主配線盤を開けると、階下に繋がってるスイッチングルーターのLANケーブルが切断されていた。

「これか！」

HYは事の次第をHGに報告した。HGは開口一番「何だと？ノートパソコンのセキュリティは？」

と凄じ怒号で言われて、HYは「わたしのせいじゃないもん！」と思いつつ、自分のスマートフォンをPA教授に渡すと、

「はい、ノートパソコン自体のサインインは認証方式が設定されていて、中身の記憶媒体とファイル自身も暗号化されています…復号化のキーですか？はい、それは私の虹彩認証になっています。はい…はい…私の落ち度ですので、くれぐれも、この子達を叱らないで下さい」

「HG社長がこちらに来るそうです」

と言って、PA教授は、HYにスマートフォンを返した。HYはそれを受け取ると、IAに電話して

「IA、もういいわよ…警備員さんに話をしてシャッターを開けて貰って…それから、准尉が来るそうだから、あなたもこっちに来て」

『はい、HY先輩』

H Yは通話を切ると、椅子に座って深いため息をついた。それを見たT YとI Y

「(あーあ、淮尉がこっちに来るって…叱られるうー)」

と考え、恐怖に顔がひきつった。

●H G登場！

H GがP A教授の研究室に入ってきた。H Y達は全員直立不動のまま緊張していた。

H Gは全員を睨みつけるように見回して、

「…誰が一番詳しく説明が出来る？」

と訊ねた。それにH Yが

「はい、説明します」

と言って、H YがT YとI Yから聞いた話を時系列で話し、最後にL A Nケーブルの話をした。

「報告ご苦労！」

「ハイ！」

と言って、H YはH Gに敬礼した。それを見て残りの娘共は「(H Y先輩ゴメンナサイ)」
「」
と思っ、皆H Gに敬礼した。それを見たP A教授は

「あー、皆さんの会社って…」

と言ったので、H Gは

「あつ、この娘らは私の民兵会社時代の教え子達なので、たまに民兵時代の癖がでるのです
よ」

と澄ました顔で説明した。

「あら…そうですか。そもそも私が悪いので、皆さんを責めないでくださいな」

「はい、ありがとうございます。早速ノートパソコン取り返す算段をしないといけません、

発砲事件がありましたので、警察を呼ぶことになります。申し訳ございません」

「いえ、仕方ありません。お願いします」

「H Y」

「はい」

「警察署に連絡しろ…その前にT Y」

「はい」

「お前、撃ち返したか？」

「いえ、暗くて相手が見えなかったので…」

「そうか、撃たなくてなにより…H Y、その事も含めて警察に連絡」

「はい」

「T Y」

「はい」

「銃撃の現場に案内しろ」

「はい」

「I Y」

「はい」

「P A教授の警護を続けろ」

「はい」

「I A」

「はい」

「警備室に戻って任務続行」

「はい」

とH Gがテキパキと指示を出すと、T Yと発砲場所に向かった。それを見たP A教授

「H G社長、決断が速いわね」

と驚いていた。

H GがT Yに案内されて発砲があった場所に着くと、スマートフォンでI Aを呼び出し、
「この廊下の電気は付けられるか？」

『はい、ただいま…階段のスイッチで点けられるそうです』

「ご苦労」

H Gは階段に行くと、電灯のスイッチを入れた。

「どの辺から銃声がしたか？」

「今准尉が立っておられる場所から向こう側の部屋の入り口でブラスト（銃口から弾丸を
射出した時に出る火薬の燃焼光）が見えました」

とT Yが指差した。H GとT Yがその部屋に行くと、

「T Y、薬莢がないか探してくれ、見つけても触るなよ」

「はい」

H GはT Yとは別に部屋の入り口から、弾丸がありそうな場所に見当をつけて弾痕を探
した。

「准尉、ありました」

「おう、こつちもあつたぞ」

と言って、H GはT Yの元に行き、薬莢を見ると

「45口径…か、これでうちの銃ではない事が証明される」

警察が来たところで、H GはH Yから受けた報告と自分達が見つけた薬莢と弾痕についての説明をした。

P A教授は被害者として、I YとT Yはそれぞれ、第一発見者としてその場で事情聴取を受けた。

「H Y」

「はい」

「このお金で、人数分の缶コーヒーでも買ってきてくれ…それからI Aも呼んでくるように」

「はい」

●めんどくせー

P A教授の研究室で、缶コーヒーを飲みながら、

「さて、どうやってと教授のノートP Cを取り返すか…」

とH Gが言うと、H Yが

「教授のノートパソコンは暗号化されていて、教授の虹彩でしか復号化出来ないのですよね」

「P A教授、どうなんですか？」

H Yの言葉を受けたH GがP A教授に確認した。

「はい」

と答えるP A教授にH Gは再度、

「教授の虹彩認証の暗号化の範囲は、ノートパソコンのサインインだけですか？それとも

内部の記憶媒体毎ですか？」

と確認の意味で訊ねた。

「はい：大学で支給されているノートパソコンは、起動時のサインインを含めて中身の媒体のファイル毎に暗号化が施されると聞いています。ファイルを開くには、所有者の虹彩認証が必要になります」

「それを知っているのは？」

「それは：この大学に勤務している人は皆知っています」

「そうですか」

「それがなにか？」

「それを知っているのと知らない事で、犯人の再度接触して来る時間が違ってくるのです」と言つて、HGはニタリと笑った。

「どういう事ですか？」

とPA教授が訊ねると、

「犯人がノートパソコンの中のファイルを早く復号化したければ、今この時点で何らかの接触を教授ご自身に謀つて来る可能性があります。逆にそれを知らないと、まず何とかしてノートパソコンのIDとパスワードを解析しようとしませんから、時間がかかり、挙句に教授の虹彩じゃないと論文ファイルにアクセス出来ないことを知り、そこで初めて教授を拉致するか、もう一度ここに押し入って、別の手段を取るでしょう…」

「まあ…」

とHGとPA教授が話している時に、PA教授のスマートフォンが鳴る。発信者はGM助教
授：PA教授が不安げにHGを見るとHGは静かに頷いた。

「はい、PAです」

『PA教授：すみません、今すぐ来ていただけますか？』

「どこにです？」

『今、大学の裏通りに居ますが、変な奴らに捕まって…今脅されて教授に連絡して来てもらうように電話しろと…』

「何ですって！」

と言って、驚くP A教授にH Gは『「今行きます。」と言って通話を切ってください』と書いたメモを見せた。P A教授は頷くと

「わかりました…今行きます」

と言って、通話を切った。

「…これで、犯人は判明しました…ほぼね」

「ほぼ？」

H Gの言葉を不審に思ったP A教授が訊ねると、

「はい、ノートパソコンを奪ったのはG M助教授ご本人です…しかし、彼の後ろには真犯人が居るでしょう…」

「誰ですか…まさか、××△インダストリー研究所？」

「と、私は考えています」

「では、今の電話は」

「多分、G M助教授の自作自演の拉致劇でしょうな」

と言って、H Gが肩をすくめると、

「…なんて事！」

「とにかく、時間がありません。ノートパソコンを奪い返しましょう…H Y」

「はい」

「I Aと共に、××△インダストリー研究所の入り口で待機。多分、G M助教授を連れてく
ると思われるので、門を潜るところをスマートフォンで撮影しろ！I AはH Yを案内しろ。
ただし、大学の裏通りは避ける！G M教授達がいるから。すぐ行け！」

「はい」

「T Y」

「はい」

「お前は、教授と一緒に行け。一人で来いとは言っていないから、ついて行くように…多分、
その場でノートパソコンの論文ファイルを復号化する可能性が高い。多分G M助教授に銃
か何かを突き付けているから、時間稼ぎをしろ」

「はい」

「I Y」

「はい」

「俺とついてこい、まったく…めんどくせー」

「」「(あつ、出た！)」「」

●事件解決

大学の裏通り…

P A教授とT Yは二人で歩いて行く。H GとI Yはその後をつける。

その行く手に、G M助教授が3人の男達に囲まれていた。

H Gはそれを見て

「…やはり車は用意していないようだ」

「どうしてですか？ 准尉」

「手前の男がノートパソコンを抱えているだろ？ 普通ならこう言う場合は、ノートパソコンは車等に確保しといて、まずここでP A教授を拉致後、車等に押し込んでから抵抗する術を奪い、ノートパソコンのサインインとファイルの復号化を試みる。それが何らかの事情で出来ない…この近くの××△インダストリー研究所に雇われた連中だろう…この道が歩行者専用道だから、この道を外れた場所に車を置いていても、車を使って××△インダストリー研究所に行くには、一旦、Y 国際大学を周る道を通るしかない。Y 国際大学には今警察が来ているから、検問にかかる可能性を恐れて更に車は使えない」

「そうですか」

「I Y」

「はい」

「お前は、ここで連中を見張れ。隙が生じたら、相手の拳銃を狙え…出来るな」

「ハイ！」

「それから、P A教授のノートパソコンの確保が第一優先だ。間違っても当てるなよ」

「はい」

「俺は、向こうに回り込む、間違っても俺を撃つなよ。それから一人はわざと逃がせ」

「はい、任せてください」

H Gはそう言って、I Yを残して一旦裏通りを外れて、G M教授達の後ろに回り込んだ。

G M助教授達の後ろに出ると、そこに先客が居た。H Gの姿に驚いて身構える。

H Gは手をかざして、

「お静かに…いま任務中ですので…私はP A教授に雇われたエージェント会社のH Gと申

します。間違っていないければ、あなたは△×△と言うベンチャー企業の社長DBさんとお見受けします」

「はっ、はい…よくご存じで」

「はは、当てずっぽうですが、部下から話を伺ってしまして」

「部下ですか？」

「はい…ま、詳しくは後で…連中銃を所持していますから、隠れて見ていてください」

「…はい」

その頃…

「PA教授…」

一人の男に羽交い絞めにされて、拳銃を突き付けられているGM助教授。

「よし、来たな…教授はこっちに來てもらおうか…その女！お前もこっちに來い！」

と言った。PA教授は

「(TYさん?)」

と小声で話しかけると、TYも

「(准尉は、時間稼ぎをしろ…と言っていましたから、GM助教授の解放を要求してください…多分解放しないでしょうけど…相手は教授の目が必要ですから、滅多な事はしません)」

「(…はい)」

と小声で応じた、PA教授が

「まずは、GM助教授を解放してください！」

「教授がこっちに來るのが先だ」

「いいえ、GM助教授が先です」

この押し問答が続いている内に、男達の背後から明かりが点滅した。『トラ・トラ・トラ』

…それを見てT Yは「(また、しょーもない合図を…)」を突っ込みを入れつつ、H Gが背後に回ったことを知った。それと同時にI YもH Gの位置を確認して、拳銃を構えた。

男達が、押し問答に焦れて、

「このアマ！いい加減にしろ！」

と中の一人がP A教授の隣にいるT Yに向けて拳銃を構えると、T YはP A教授との入り、拳銃を抜いて発砲して、自分に向けた拳銃を打ち落とした。それと同時に、I Yが発砲し、ノートパソコンを持った男の拳銃を打ち落とした。

H GはG M助教授を羽交い絞めに行っている男に襲い掛かる。

一旦、G M助教授の開放に成功するが、別の男が拳銃を拾い、P A教授に銃を向けたので、G M助教授はP A教授を庇って凶弾に倒れる。

G M助教授を撃った男は、I Yによって取り押さえられた。H GとI Yによって取り押さえられた男を残して、残った一人の男は逃げ出した。

「准尉、一人逃げました」

とT Yが言うと、

「それは、最初から織り込み済み…後はH Yに任せた。I Y、ノートパソコンは無事か？」

「はい、ここに」

ノートパソコンは、I Yが取り押さえた男が持っていて、I Yが奪還していた。

「T Y、警察と救急車を呼んでくれ、至急！」

「はい」

P A教授は凶弾に倒れたG M助教授の元に走り寄り、抱き起すと、

「しっかりしてください！」

「教授、私はあなたと一緒に開発した新素材の論文を独り占めにされる事に嫉妬して、今回このような事を起こしました」

PA教授は慌ててIYからノートパソコンを奪うように持つと、直ぐに起動して、論文のファイルを開くと

「これを見て」

「？」

「この論文は、私とあなたの共同論文になってるの。ここにあとあなたのサインが入れば、この論文は完成するの」

「…教授、あなたって人は…」

「さあ、ここにサインを書き込んで」

PA教授はGM助教授にタッチペンを渡した。

「…やはり、私には出来ません」

「なんでよ！ここにサインすれば、あなたの功績も歴史に残るのよ！あなたがサインしないなら、私はこの論文を取り下げます！」

「教授…我儘言わんでください…この論文が発表されれば、どんなに人の役に立つか…分かりました。サインしましょう」

と言って、GM助教授はPA教授からタッチペンを受け取り、震える手でノートパソコンの画面に表示されている論文にサインをした」

「これで…いいですか…ゲフ！」

「GMさん！」

GM助教授の手からタッチペンが落ちた。

●この野暮天が！

「はい、もう出てきて大丈夫ですよ」

とHGが声をかけると、植木の陰から人影が現れた。

最初、誰だか分らなかったが、街路灯に照らされた顔を見て、PA教授は驚いた。

「DB…」

「PA大丈夫だったか？」

「あなた、なんでここに…」

「いや、この先の××△インダストリー研究所が前から、PAの研究を狙っているのを知って、張り込んでいたんだ…なにか、PAにちょっかいを出さないかと…そうしたら、Wの散歩を請け負っていると言う、IAさんと言う女性が、この先でPAが危ない目にあっている事を告げられ、急いできたなら、そのHGさんに隠れて見てるように言われたんだ」

「DB…」

「GM助教授は…君は怪我してない？大丈夫だったかい？PA…」

GM助教授を抱きかかえながら、PAとDB…見つめ合う二人…（多分、DBは、GM助教授の事を「（邪魔だこいつ!）」と思っているかも…作者(笑)）

「はい、はい！お二人供いい所をスミマセン」

といい雰囲気のをHGが割って入る。

「HGさん…」

と言って、驚くDB…

「DBさん、あなたには重要な役割をお願いしたい」

「なんですか？」

突然HGに邪魔をされて、腹を立てて答えると、

「先程の、私の二人の部下の発砲について、”発砲許可申請（銃器発砲許可申請書）”を作

成する場合に、顧客であるP A教授に対する正当防衛と言う事を証言していただきたい」

「…わかりました」

不満そうにD Bが答えた。

このやり取りを見ていたT YとI Y「(うわつ、野暮…それから、えげつな〜)」と思った。

同時刻、××△インダストリー研究所入り口前：

H YとI Aは、H Gの指示した撮影ポイントに居た。

「H Y先輩、誰か来ますよ」

「ホントだ」

と言って、H Yがスマートフォンを構えると、

「H Y先輩、あたしが撮影します。相手は拳銃持っているんですよ？」

「そうけど…」

「だったら、援護をお願いします」

「分ったわ、任せた」

と言って、H Yはスマートフォンをしまい、拳銃をホルスターから抜いて構えた。

「I A来たわよ…いい？」

「はい、H Y先輩…あれ？一人だけですよ？」

「…ホントだ、准尉は『G M助教授を連れてくるはず…』と言ったけど…さっきの銃声でなにか、向こうであつたのね…いいから撮影してI A」

「ハイな姐…じゃなかった！H Y先輩」

男は、手に拳銃を持ったまま、度々後ろを振り向きながら走ってきて、××△インダストリー研究所入り口から中に入った。

I Aはそれを逃さず、数枚の写真を撮った。

I Aは撮り終わると、スマートフォンをチェックした。それをH Yが後ろから覗き込んで「あつ、ちゃんと撮れてるわ。門の看板と犯人…拳銃までハッキリと…やるわね、I A。お手柄！」

と言って、H YがI Aを後ろから抱きしめた。

「はい」

I Aは嬉しそうに、H Yを見上げた。

I Aにより撮影された写真は、証拠物件として警察に提出され、G M助教授の殺人幫助として××△インダストリー研究所に捜査の手が入り、そこから、P A教授の研究室から盗まれた、研究試料や論文に使用したデータ類の書類が発見され、P A教授の研究成果窃盗の関与が疑われ、更に捜査が入った。

取り返えされたノートパソコンより、P A教授の学会誌論文は学会誌サーバーに改めてアップロードされ、入稿が完了し、無事学会誌に掲載された。

その後、T Y達の協力により、学会発表用の原稿もできあがり、帝都大学での学会での発表も無事に終わった。

帝都大学での学会発表を終え、Y 国際大学に戻ってきたH GとT YとH Y。

P A教授の研究室で、

「では、我々の任務はこれまでとします」

「みなさん、ありがとうございます」

と言ってP A教授は頭を下げた。

「では」

と言って、H G達が研究室を出ようとなると、研究生のN MがH Yに近づいて来て、
「やあ、また会ったね。君はP A教授の警護をしていたエージェント会社の社員だったんだね」

「ハイ」

「任務が終わったんなら、僕と食事に行かない？」

と言った。H Yは渋い顔でH Gを見上げる。T Yは笑いをこらえていた：

「どう？」

と聞いているN Mに、H Yは黙ってジャケットの内ポケットからか “特別銃器携帯・使用許可証” を自ら見せて、そこに記載されているH Yの生年月日を見て驚くN Mに

「…こんな、オバサンに恋したらダメよ」

と一言いって、H Gの腕を取り、

「さっす准尉、帰りましょう」

と言った。

その晩、P A教授の家に遊びに来たI Aは

「Wちゃん、教授帰ってきてよかったねー、一杯甘えさせてもらうんだよ」

「ヲン！」

「あたしは、今日までだからね…」 「クウーン」

と言って、Wを抱きしめ涙目になるI Aに

「I Aさん」

「はい」

「今日までWのお散歩ありがとうね。これ少ないけど…」

と言つて、P A教授はI Aにお金の入った封筒を渡した。

「教授…そんな…いただけません」

「いいのよ、お陰でWもご機嫌だし…これで何か美味しいモノ食べてね。それから、時々Wに会い来てね。また忙しくなったら、お世話をお願いするかもしれないから」

「はい、お任せください」

●エピローグ

H GはA C理事長から任務の報酬について話をしていた。

「この度は、P A教授の警護と新素材窃盗犯を捕まえていただき、ありがとうございます」

「いえ、G M助教授はお救いできませんでしたが…」

「彼も、論文の共同執筆者として名が残ります。したことは許せませんが…これは、成功報酬です…どうぞお納めください」

「はい、ありがとうございます」

「それと…」

「？」

「これは、P A教授から論文翻訳の翻訳料です」

と言つて、A Cは別の封筒をH Gに出した。

「？？」

「お宅のI Yさんのお陰で、学会誌に掲載されたD 国語の論文の出来が良く、学会誌の選考委員からも読みやすいと評判でしたので、P A教授がI Yさんに対して、謝礼の意味で収めていただくよう預かりました」

「そうですか…（なに勝手な事を…他の娘共は知つてて、隠してたな！）、では私が預かりましてI Yに渡します」

「そうしてください」

「P A教授は、その後…」

「はい、ベンチャー企業△×△との共同研究助成金活用のお話を受け入れ、量産に向けて動き始めたそうです。ベンチャー企業△×△の社長さんは最近知りましたが、D Bさんと言います、こちらの卒業生でP A教授の同期だそうです」

「そうですか、早く市販されるといいですね」

H Gは白山亭に帰り、経理のK Mに

「Y 国際大学の仕事の報酬」

と言って、お金が入った袋を渡すと、K Mが直ぐに封を開けて中身の金額とそこに入っている明細書を確認する。明細書を見て

「4人出して、3・5人分の報酬？なにこれ？」

「当初2人で請け負ったんだが、専任者が別の事で任務に支障（H Yの幽霊嫌いとT Yの犬嫌い）があるから更に2人（I YとI A）出した。先方はそれを評価してくれてそこまで出してくれた…」

「でも、結局赤字じゃん」

「…スマン」

H GはI Yを自室に呼んだ。

「准尉、お呼びですか？」

白山亭店内に入る前の女給の格好をしたI YがH Gの部屋に入って座る。

「P A教授から、お前にと…」

と言って、H Gは『翻訳謝礼金』と書かれた封筒を指し出す。I Yがそれを受け取ろうとす

るが、H Gはなぜか手を話さない。

「？」

「俺が素直に渡さないのはどうしてか解るか？」

「私が准尉の懸念を他所に、P A教授の学会誌掲載の論文の翻訳を勝手に手伝ったからですか？」

「そうだ」

「でも、結局論文は出来あがりましたよね」

「そうだ：論文は出来上がり、学会誌の選考委員からも読みやすいとお褒めの言葉も貰ったそうだ」

「ならば、私のやった事は良かったのでは？」

「結果的にはね：もし翻訳を間違えて学会誌に発表されてみる、P A教授が苦勞して研究の成果が台無しになるところだったんだぞ」

H Gが怒ってI Yに言う、それに納得しないI Yは無言でH Gを見つめた。

「学会誌に発表された論文は、世に論文が出るだけじゃないんだ、世界中で論文の追試験が行われるんだ、その時に嘘や間違いが発覚したら、P A教授の名誉は地に落ちるんだよ」とH Gがさらに言うと、I Yはそれを聞いてハツとして

「准尉は、それを知ってて：私に翻訳の任務を与えなかったのですね：」

「そうだ」

「私は、この報奨金が入った袋を准尉が離さなかったのは、私が勝手にやって成功したことに嫉妬して手を離さなかったと思っていましたが、准尉はP A教授の研究成果に万が一の事があつたら、私だけの責任ではすまなくなるとの考えで、それを私に気づかせる為に：」

「そうだ」

「はい、教えて下さり、ありがとうございます。もう二度と独断専行せず勝手な事はいたし

ません。報奨金も辞退いたします」

と言って、I YはH Gに頭を深く下げた。それを見てH Gは

「I Y…」

「はい」

「分ったのなら、それでいい…この報奨金は受け取りなさい。P A教授の感謝の気持ちだから」

「はい、ありがとうございます」

白山亭店内…

I AとI Yが女給服姿で、I Aのスマートフォンの待ち受け画面にしたP A教授の愛犬Wを見ながら、

「P A教授のワンちゃん可愛かったね」

「そうね」

「ここでワンちゃん飼えないなあー」

「いいわね」

とI Yが頷くと、T Tがバーカウンターから

「あら、駄目よ」

「なんですT Tさん」

「准尉が、『これ以上手間のかかるモノいらん！』って…『モノ』ってきつとあなた達この事だと思うわ。早く手間がかからないようになって頂戴ね」

「「はー」」